枯野抄

芥川龍之介

丈艸(ぢやうさう)、去来(きよらい)を召し、昨夜目のあはざるまま、ふと案じ入りて、呑舟(どんしう)に書かせたり、おのおの咏じたまへ

旅に病むで夢は枯野をかけめぐる

――花屋日記――

元禄七年十月十二日の午後である。一しきり赤々と朝焼けた空は、又昨日のやうに時雨(しぐ)れるかと、大阪商人(あきんど)の寝起の眼を、遠い瓦屋根の向うに誘つたが、幸(さいはひ)葉をふるつた柳の梢(こずゑ)を、煙らせる程の雨もなく、

やがて曇りながらもうす明い、もの静な冬の昼になつた。立ちならんだ町家（まちや）の間を、流れるともなく流れる川の水さへ、今日はぼんやりと光沢（つや）を消して、その水に浮く葱（ねぶか）の屑も、気のせゐか青い色が冷たくない。まして岸を行く往来（ゆきき）の人々は、丸頭巾をかぶつたのも、革足袋をはいたのも、皆凩（こがらし）の吹く世の中を忘れたやうに、うつそりとして歩いて行く。暖簾（のれん）の色、車の行きかひ、人形芝居の遠い三味線の音（ね）――すべてがうす明い、もの静な冬の昼を、橋の擬宝珠（ぎぼうしゆ）に置く町の埃（ほこり）も、動かさない位、ひつそりと守つてゐる……

この時、御堂前南久太郎町（みだうまへみなみきうたらうまち）、花屋仁左衛門の裏座敷

では、当時俳諧の大宗匠と仰がれた芭蕉庵松尾桃青（たうせい）が、四方から集つて来た門下の人人に介抱されながら、五十一歳を一期（いちご）として、「埋火（うづみび）のあたたまりの冷むるが如く、」静に息を引きとらうとしてゐた。時刻は凡そ、申（さる）の中刻にも近からうか。――隔（へだ）ての襖（ふすま）をとり払つた、だだつ広い座敷の中には、枕頭に炷（た）きさした香の煙が、一すぢ昇つて、天下の冬を庭さきに堰（せ）いた、新しい障子の色も、ここばかりは暗くかげりながら、身にしみるやうに冷々する。その障子の方を枕にして、寂然（じやくねん）と横はつた芭蕉のまはりには、先（まづ）、医者の木節（もくせつ）が、夜具の下から手を入れて、間遠い脈を守（も）りながら、浮

かない眉をひそめてゐた。その後に居すくまつて、さつきから小声の称名を絶たないのは、今度伊賀から伴に立つて来た、老僕の治郎兵衛に違ひない。と思ふと又、木節の隣には、誰の眼にもそれと知れる、大兵肥満の晋子其角が、紬の角通しの懐を鷹揚にふくらませて、憲法小紋の肩をそば立てた、ものごしの凛々しい去来と一しよに、ぢつと師匠の容態を窺つてゐる。それから其角の後には、法師じみた丈艸が、手くびに菩提樹の珠数をかけて、端然と控へてゐたが、隣に座を占めた乙州の、絶えず鼻を啜つてゐるのは、もうこみ上げて来る悲しさに、堪へられなくなつたからであ

らう。その容子をぢろぢろ眺めながら、古法衣の袖をかきつくろつて、無愛想な頤をそらせてゐる、背の低い僧形は惟然坊で、これは色の浅黒い、剛愎さうな支考と肩をならべて、木節の向うに坐つてゐた。あとは唯、何人かの弟子たちが皆息もしないやうに静まり返つて、或は右、或は左と、師匠の床を囲みながら、限りない死別の名ごりを惜しんでゐる。が、その中でもたつた一人、座敷の隅に蹲つて、ぴつたり畳にひれ伏した儘、慟哭の声を洩してゐたのは、正秀ではないかと思はれる。しかしこれさへ、座敷の中のうすら寒い沈黙に抑へられて、枕頭の香のかすかな匂を、擾

す程の声も立てない。

芭蕉はさつき、痰喘にかすれた声で、覚束ない遺言をした後は、半ば眼を見開いた儘、昏睡の状態にはいつたらしい。うす痘痕のある顔は、顴骨ばかり露に瘦せ細つて、皺に囲まれた唇にも、とうに血の気はなくなつてしまつた。殊に傷しいのはその眼の色で、これはぼんやりした光を浮べながら、まるで屋根の向うにある、際限ない寒空でも望むやうに、徒に遠い所を見やつてゐる。「旅に病んで夢は枯野をかけめぐる。」――事によるとこの時、このとりとめのない視線の中には、三四日前に彼自身が、その辞世の句に詠じ

た通り、茫々(ばうばう)とした枯野の暮色が、一痕(いつこん)の月の光もなく、夢のやうに漂つてでもゐたのかも知れない。

「水を。」

木節はやがてかう云つて、静に後にゐる治郎兵衛を顧みた。一椀の水と一本の羽根楊子とは、既にこの老僕が、用意して置いた所である。彼は二品をおづおづ主人の枕元へ押し並べると、思ひ出したやうに又、口を早めて、専念に称名(しようみやう)を唱へ始めた。治郎兵衛の素朴な、山家育ちの心には、芭蕉にせよ、誰にせよ、ひとしく彼岸(ひがん)に往生するのなら、ひとしく又、弥陀(みだ)の慈悲にすがるべき筈だと云ふ、堅い信念が根を張つてゐ

たからであらう。

一方又木節は、「水を」と云つた刹那の間、果して自分は医師として、万方を尽したらうかと云ふ、何時もの疑惑に遭遇したが、すぐに又自ら励ますやうな心もちになつて、隣にゐた其角の方をふりむきながら、無言の儘、ちよいと相図をした。芭蕉の床を囲んでゐた一同の心に、愈と云ふ緊張した感じが咄嗟に閃いたのはこの時である。が、その緊張した感じと前後して、一種の弛緩した感じが――云はば、来る可きものが遂に来たと云ふ、安心に似た心もちが、通りすぎた事も亦争はれない。唯、この安心に似た心もちは、誰もそ

の意識の存在を肯定しようとはしなかつた程、微妙な性質のものであつたからか、現にここにゐる一同の中では、最も現実的な其角でさへ、折から顔を見合せた木節と、際どく相手の眼の中に、同じ心もちを読み合つた時は、流石にぎよつとせずにはゐられなかつたのであらう。彼は慌しく視線を側へ外らせると、さり気なく羽根楊子をとりあげて、

「では、御先へ」と、隣の去来に挨拶した。さうしてその羽根楊子へ湯呑の水をひたしながら、厚い膝をにじらせて、そつと今はの師匠の顔をのぞきこんだ。実を云ふと彼は、かうなるまでに、師匠と今生の別をつ

げると云ふ事は、さぞ悲しいものであらう位な、予測めいた考もなかつた訳ではない。が、かうして愈末期（いよいよまつご）の水をとつて見ると、自分の実際の心もちは全然その芝居めいた予測を裏切つて、如何にも冷淡に澄みわたつてゐる。のみならず、更に其角が意外だつた事には、文字通り骨と皮ばかりに瘦せ衰へた、致死期の師匠の不気味な姿は、殆（ほとんど）面（おもて）を背（そむ）けずにはゐられなかつた程、烈しい嫌悪の情を彼に起させた。いや、単に烈しいと云つたのでは、まだ十分な表現ではない。それは恰（あたか）も目に見えない毒物のやうに、生理的な作用さへも及ぼして来る、最も堪へ難い種類の嫌悪であ

つた。彼はこの時、偶然な契機によつて、醜き一切に対する反感を師匠の病軀（びやうく）の上に洩らしたのであらうか。或は又「生」の享楽家たる彼にとつて、そこに象徴された「死」の事実が、この上もなく呪ふ可き自然の威嚇（ゐかく）だつたのであらうか。——兎に角、垂死（すゐし）の芭蕉の顔に、云ひやうのない不快を感じた其角は、殆（ほとんど）何の悲しみもなく、その紫がかつたうすい唇に、一刷毛（ひとはけ）の水を塗るや否や、顔をしかめて引き下つた。尤（もつと）もその引き下る時に、自責に似た一種の心もちが、刹那に彼の心をかすめもしたが、彼のさきに感じてゐた嫌悪の情は、さう云ふ道徳感に顧慮すべく、余り強烈だつ

たものらしい。
　其角に次いで羽根楊子をとり上げたのは、さつき木節が相図をした時から、既に心の落着きを失つてゐたらしい去来である。日頃から恭謙の名を得てゐた彼は、一同に軽く会釈(ゑしやく)をして、芭蕉の枕もとへすりよつたが、そこに横はつてゐた老俳諧師の病みほうけた顔を眺めると、或満足と悔恨との不思議に錯雑した心もちを、嫌でも味はなければならなかつた。しかもその満足と悔恨とは、まるで陰と日向(ひなた)のやうに、離れられない因縁(いんねん)を背負つて、実はこの四五日以前から、絶えず小心な彼の気分を掻乱(かきみだ)してゐたのである。と云ふのは、

師匠の重病だと云ふ知らせを聞くや否や、すぐに伏見から船に乗つて、深夜にもかまはず、この花屋の門を叩いて以来、彼は師匠の看病を一日も怠つたと云ふ事はない。その上之道（しだう）に頼みこんで手伝ひの周旋を引き受けさせるやら、住吉大明神へ人を立てて病気本復を祈らせるやら、或は又花屋仁左衛門に相談して調度類の買入れをして貰ふやら、殆（ほとんど）彼一人が車輪になつて、万事万端の世話を焼いた。それは勿論去来自身進んで事に当つたので、誰に恩を着せようと云ふ気も、皆無だつた事は事実であるが、一身を挙げて師匠の介抱に没頭したと云ふ自覚は、勢（いきほひ）、彼の心の底に大きな満

足の種を蒔(ま)いた。それが唯、意識せられざる満足として、彼の活動の背景に暖い心もちをひろげてゐた中は、元より彼も行住坐臥に、何等のこだはりを感じなかつたらしい。さもなければ夜伽(よとぎ)の行燈(あんどう)の光の下で、支考と浮世話に耽つてゐる際にも、故(ことさら)に孝道の義を釈(と)いて、自分が師匠に仕へるのは親に仕へる心算(つもり)だなどと、長々しい述懐はしなかつたであらう。しかしその時、得意な彼は、人の悪い支考の顔に、ちらりと閃いた苦笑を見ると、急に今までの心の調和に狂ひの出来た事を意識した。さうしてその狂ひの原因は、始めて気のついた自分の満足と、その満足に対する自己批評とに

存してゐる事を発見した。明日にもわからない大病の師匠を看護しながら、その容態をでも心配する事か、徒に自分の骨折ぶりを満足の眼で眺めてゐる。――これは確に、彼の如き正直者の身にとつて、自ら疚しい心もちだつたのに違ひない。それ以来去来は何をするのにも、この満足と悔恨との扞挌から、自然と或程度の掣肘を感じ出した。将に支考の眼の中に、偶然でも微笑の顔が見える時は、反つてその満足の自覚なるものが、一層明白に意識されて、その結果愈自分の卑しさを情なく思つた事も度々ある。それが何日か続いた今日、かうして師匠の枕もとで、末期の水を供す

る段になると、道徳的に潔癖な、しかも存外神経の繊弱な彼が、かう云ふ内心の矛盾の前に、全然落着きを失つたのは、気の毒ではあるが無理もない。だから去来は羽根楊子をとり上げると、妙に体中が固くなつて、その水を含んだ白い先も、芭蕉の唇を撫でながら、頻にふるへてゐた位、異常な興奮に襲はれた。が、幸、それと共に、彼の睫毛に溢れようとしてゐた、涙の珠もあつたので、彼を見てゐた門弟たちは、恐くあの辛辣な支考まで、全くこの興奮も彼の悲しみの結果だと解釈してゐた事であらう。

やがて去来が又憲法小紋の肩をそば立てて、おづお

づ席に復すると、羽根楊子はその後にゐた丈艸の手へわたされた。日頃から老実な彼が、つつましく伏眼になつて、何やらかすかに口の中で誦しながら、静に師匠の唇を沾してゐる姿は、恐らく誰の見た眼にも厳だつたのに相違ない。が、この厳な瞬間に突然座敷の片すみからは、不気味な笑ひ声が聞え出した。いや、少くともその時は、聞え出したと思はれたのである。それはまるで腹の底からこみ上げて来る哄笑が、喉と唇とに堰かれながら、しかも猶可笑しさに堪へ兼ねて、ちぎれちぎれに鼻の孔から、迸つて来るやうな声であつた。が、云ふまでもなく、誰もこの場合、

笑を失したものがあつた訳ではない。声は実にさつきから、涙にくれてゐた正秀の抑へに抑へてゐた慟哭（どうこく）が、この時胸を裂いて溢れたのである。その慟哭は勿論、悲愴（ひさう）を極めてゐたのに相違なかつた。或はそこにゐた門弟の中には、「塚も動けわが泣く声は秋の風」と云ふ、師匠の名句を思ひ出したものも、少くはなかつた事であらう。が、その凄絶（せいぜつ）なる可き慟哭にも、同じく涙に咽（むせ）ばうとしてゐた乙州は、その中にある一種の誇張に対して、――と云ふのが穏（おだやか）でないならば、慟哭を抑制すべき意志力の欠乏に対して、多少不快を感じずにはゐられなかつた。唯、さう云ふ不快の性質は、どこ

までも智的なものに過ぎなかつたのであらう。彼の頭が否と云つてゐるにも関らず、彼の心臓は忽(たちま)ち正秀の哀慟の声に動かされて、何時か眼の中は涙で一ぱいになつた。が、彼が正秀の慟哭を不快に思ひ、延(ひ)いては彼自身の涙をも潔(いさぎよ)しとしない事は、さつきと少しも変りはない。しかも涙は益(ますます)眼に溢れて来る——乙州は遂に両手を膝の上についた儘、思はず嗚咽(をえつ)の声を発してしまつた。が、この時歔欷(きよき)するらしいけはひを洩らしたのは、独り乙州ばかりではない。芭蕉の床の裾の方に控へてゐた、何人かの弟子の中からは、それと殆(ほとんど)同時に洟(はな)をすする声が、しめやかに冴(さ)えた座敷

の空気をふるはせて、断続しながら聞え始めた。

その惻々（そくそく）として悲しい声の中に、菩提樹の念珠を手頸にかけた丈艸は、元の如く静に席へ返つて、あとには其角や去来と向ひあつてゐる、支考が枕もとへ進みよつた。が、この皮肉屋を以て知られた東花坊には周囲の感情に誘ひこまれて、徒（いたづら）に涙を落すやうな繊弱な神経はなかつたらしい。彼は何時もの通り浅黒い顔に、何時もの通り人を莫迦（ばか）にしたやうな容子を浮べて、更に又何時もの通り妙に横風に構へながら、無造作に師匠の唇へ水を塗つた。しかし彼と雖（いへど）もこの場合、勿論多少の感慨があつた事は争はれない。「野ざらし

を心に風のしむ身かな」――師匠は四五日前に、「かねては草を敷き、土を枕にして死ぬ自分と思つたが、かう云ふ美しい蒲団の上で、往生の素懐を遂げる事が出来るのは、何よりも悦ばしい」と繰返して自分たちに、礼を云はれた事がある。が、実は枯野のただ中も、この花屋の裏座敷も、大した相違がある訳ではない。現にかうして口をしめしてゐる自分にしても、三四日前までは、師匠に辞世の句がないのを気にかけてゐた。それから昨日は、師匠の発句(ほつく)を滅後に一集する計画を立ててゐた。最後に今日は、たつた今まで、刻々臨終に近づいて行く師匠を、どこかその経過に興味でもあ

るやうな、観察的な眼で眺めてゐた。もう一歩進めて皮肉に考へれば、事によるとその眺め方の背後には、他日自分の筆によつて書かるべき終焉記の一節さへ、予想されてゐなかつたとは云へない。して見れば師匠の命終に侍しながら、自分の頭を支配してゐるものは、他門への名聞、門弟たちの利害、或は又自分一身の興味打算――皆直接垂死の師匠とは、関係のない事ばかりである。だから師匠はやはり発句の中で、屡予想を逞くした通り、限りない人生の枯野の中で、野ざらしになつたと云つて差支へない。自分たち門弟は皆師匠の最後を悼まずに、師匠を失つた自分たち自身を

悼んでゐる。枯野に窮死した先達を歎かずに、薄暮に先達を失つた自分たち自身を歎いてゐる。が、それを道徳的に非難して見た所で、本来薄情に出来上つた自分たち人間をどうしよう。――かう云ふ厭世的な感慨に沈みながら、しかもそれに沈み得る事を得意にしてゐた支考は、師匠の唇をしめし終つて、羽根楊子を元の湯呑へ返すと、涙に咽（むせ）んでゐる門弟たちを、嘲（あざけ）るやうにじろりと見廻して、徐（おもむろ）に又自分の席へ立ち戻つた。人の好い去来の如きは、始からその冷然とした態度に中（あ）てられて、さつきの不安を今更のやうに又新にしたが、独り其角が妙に擽（くすぐ）つたい顔をしてゐたのは、

どこまでも白眼で押し通さうとする東花坊のこの性行上の習気を、小うるさく感じてゐたらしい。

支考に続いて惟然坊が、墨染の法衣の裾をもそりと畳へひきながら、小さく這ひ出した時分には、芭蕉の断末魔も既にもう、弾指の間に迫つたのであらう。顔の色は前よりも更に血の気を失つて、水に濡れた唇の間からも、時々忘れたやうに息が洩れなくなる。と思ふと又、思ひ出したやうにぎくりと喉が大きく動いて、力のない空気が通ひ始める。しかもその喉の奥の方で、かすかに二三度痰が鳴つた。呼吸も次第に静になるらしい。その時羽根楊子の白い先を、将にその唇へ当て

ようとしてゐた惟然坊は、急に死別の悲しさとは縁のない、或る恐怖に襲はれ始めた。それは師匠の次に死ぬものは、この自分ではあるまいかと云ふ、殆(ほとんど)無理由に近い恐怖である。が、無理由であればあるだけに、一度(ひとたび)この恐怖に襲はれ出すと、我慢にも抵抗のしやうがない。元来彼は死と云ふと、病的に驚悸(きやうき)する種類の人間で、昔からよく自分の死ぬ事を考へると、風流の行脚(あんぎや)をしてゐる時でも、総身に汗の流れるやうな不気味な恐しさを経験した。従つて又、自分以外の人間が、死んだと云ふ事を耳にすると、まあ自分が死ぬのではなくつてよかつたと、安心したやうな心もちになる。

と同時に又、もし自分が死ぬのだつたらどうだらうと、反対の不安をも感じる事がある。これはやはり芭蕉の場合も例外には洩れないで、始(はじめ)まだ彼の臨終がこれ程切迫してゐない中は、――障子に冬晴の日がさして、園女(そのじよ)の贈つた水仙が、清らかな匂を流すやうになると、一同師匠の枕もとに集つて、病間を慰める句作などをした時分は、さう云ふ明暗二通りの心もちの間を、その時次第で徘徊(はいくわい)してゐた。が、次第にその終焉(しゆうえん)が近づいて来ると――忘れもしない初時雨(はつしぐれ)の日に、自ら好んだ梨の実さへ、師匠の食べられない容子を見て、心配さうに木節が首を傾けた、あの頃から安心は追々不

安にまきこまれて、最後にはその不安さへ、今度死ぬのは自分かも知れないと云ふ険悪な恐怖の影を、うすら寒く心の上にひろげるやうになつたのである。だから彼は枕もとへ坐つて、刻銘に師匠の唇をしめしてゐる間中、この恐怖に祟（たた）られて、殆末期（ほとんどまつご）の芭蕉の顔を正視する事が出来なかつたらしい。いや、一度は正視したかとも思はれるが、丁度その時芭蕉の喉の中では、痰のつまる音がかすかに聞えたので、折角の彼の勇気も、途中で挫折してしまつたのであらう。「師匠の次に死ぬものは、事によると自分かも知れない」――絶えずかう云ふ予感めいた声を、耳の底に聞いてゐた惟

然坊は、小さな体をすくませながら、自分の席へ返つた後も、無愛想な顔を一層無愛想にして、なる可く誰の顔も見ないやうに、上眼ばかり使つてゐた。

　続いて乙州、正秀、之道、木節と、病床を囲んでゐた門人たちは、順々に師匠の唇を沾（うるほ）した。が、その間に芭蕉の呼吸は、一息毎に細くなつて、数さへ次第に減じて行く。喉も、もう今では動かない。うす痘痕（いも）の浮んでゐる、どこか蠟（らふ）のやうな小さい顔、遥な空間を見据ゑてゐる、光の褪（あ）せた瞳の色、さうして頤（おとがひ）にのびてゐる、銀のやうな白い鬚（ひげ）――それが皆人情の冷さに凍（い）てついて、やがて赴くべき寂光土を、ぢつと夢み

てゐるやうに思はれる。するとこの時、去来の後の席に、黙然と頭(かうべ)を垂れてゐた丈艸は、あの老実な禅客の丈艸は、芭蕉の呼吸のかすかになるのに従つて、限りない悲しみと、さうして又限りない安らかな心もちとが、徐(おもむろ)に心の中へ流れこんで来るのを感じ出した。悲しみは元より説明を費すまでもない。が、その安らかな心もちは、恰(あたか)も明方の寒い光が次第に暗(やみ)の中にひろがるやうな、不思議に朗(ほがらか)な心もちである。しかもそれは刻々に、あらゆる雑念を溺らし去つて、果ては涙そのものさへも、毫(がう)も心を刺す痛みのない、清らかな悲しみに化してしまふ。彼は師匠の魂が虚夢の生

死を超越して、常住涅槃（じやうぢゆうねはん）の宝土に還つたのを喜んででもゐるのであらうか。いや、これは彼自身にも、肯定の出来ない理由であつた。それならば——ああ、誰か徒（いたづら）に踏跙（しそ）逡巡して、己を欺くの愚を敢（あへ）てしよう。丈艸のこの安らかな心もちは、久しく芭蕉の人格的圧力の桎梏（しつこく）に、空しく屈してゐた彼の自由な精神が、その本来の力を以て、漸（やうや）く手足を伸ばさうとする、解放の喜びだつたのである。彼はこの恍惚（くわうこつ）たる悲しい喜びの中に、菩提樹（ぼだいじゆ）の念珠をつまぐりながら、周囲にすすりなく門弟たちも、眼底を払つて去つた如く、唇頭（しんとう）にかすかな笑（ゑみ）を浮べて、恭々（うやうや）しく、臨終の芭蕉に礼拝

した。――

かうして、古今に倫を絶した俳諧の大宗匠、芭蕉庵松尾桃青は、「悲歎かぎりなき」門弟たちに囲まれた儘、溘然として属纊に就いたのである。

（大正七年九月）

底本：「現代日本文学大系43芥川龍之介集」筑摩書房
1968（昭和43）年8月25日初版第1刷発行
入力：j.utiyama
校正：かとうかおり
1998年6月1日公開
2004年2月26日修正
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。